



40 拾えなくていいと思いながら、馬かどうか、時間が経っても気になる。その人とは、本題についてのやりとりで手いっぱい、馬の歯のことを改めて訊く機会はない。脇へ置いたまま、いつまでも、幻の馬は脇に繋いだままで、別の対話が積み重なっていく。馬なのか、馬だったのか、確かめることはできない。

ある日、吉原幸子の詩集『オンディーヌ』（思潮社、一九七二年）を読んでいた。これまで、吉原幸子のよ  
い読者であったことはないけれど、必要があつて手に取つた。愛、罪、傷など、この詩人の作品について語ら  
れるときには必ず出てくる単語が、結局はすべてを表しているように思いつながら読み進めるうち、あるページ  
で手がとまった。「虹」という詩。その詩は、次のようにはじまる。  
どうしたことが、雨のあとの

立てかけたやうな原っぱの斜面に

ぶたが一匹 草をたべてゐる

電車の速さですぐに遠ざかった

(うしでもやぎでもうさぎでもなく)

あれは たしかにぶただつたらうか

60 なんとなく笑いを誘う。続きを読んでいくと「こころのない人間／抱擁のない愛——」という言葉が出てき  
て、作者らしさを感じさせる。周囲に配置される言葉も、その重さのなかでびしりと凍るのだけれど、それで  
も、第一連には紛れもない可笑しみがあつて、この六行だけでも繰り返し読みたい気もちになる。あれは、な  
んだつたのだらう。そんなふうには首を傾げて脳裡の残像をなぞる瞬間は、日常のなかに行くつも生まれる。多  
くのことは曖昧のまま消えていく。足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、  
輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことから、光がこぼれる。その一歩は消えていく光だ。

「虹」という詩の終わりの部分を引用しよう。  
いま わたしの前に

一枚のまぶしい絵があつて

どこかに 大きな間違いがあることは

わかつてゐるのに

それがどこなのか どうしてもわからない

消えろ 虹

65 言葉の上に、苛立ちが流れる。わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む。鮮度  
の高い苛立ちがこの詩にはあり、それに触れれば、どきりとさせられる。わからないこと、確かめられないこ  
とで埋もれている日々には掛かる虹はどんなだらう。それさえも作者にとつては希望ではない。消えろ、と宣告  
するのだから。

拾われる馬の歯。それが本当に馬の歯なら、いつ、だれに飼われていたものだらう。どんな毛の色だつた  
か。人を乗せていただらうか。あるいは荷物を運んだのだらうか。わかることはなにもない。その暗がりのな  
かで、ただひとつ明らかなことは、これはなんだらう、という疑問形がそこにはあるということだ。問いだけ  
は確かにあるのだ。

70 問いによって、あらゆるものに近づくとができる。だから、問いとは弱さかもしれないけれど、同時に、  
もっとも遠くへ届く光なのだらう。「馬の歯を拾えるんです。その言葉を思い出すと、蹄の音が化石が軽快  
に宙を駆けまわる。遠くへ行かれそうな気がしてくる。松ぼっくり。馬の歯。掌にのせて、文字のない  
そんな詩を読む人もいる。見えない文字がゆっくりと流れていく。

※ 蜂飼耳「馬の歯」(『図書』二〇一三年三月号掲載)の全文。

(蜂飼耳「馬の歯」)

問1 「日常のなかに、ずぶりと差しこまれる」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

問2 「風が荒々しい手つきでめくれれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

問3 「その一步は消えていく光だ」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

問4 「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

#### 【明治書院データベース解答解説】

【要旨】仕事の打ち合わせで理系の人と会った。その人は、松ぼっくりや馬の歯を拾った話をしてくれた。初対面の人との話は、未知の本のページをめくるようである。吉原幸子の「虹」という詩の第一連には紛れもない可笑しみがあるが、終わりの部分では「消えろ 虹」という言葉の上に、苛立ちが流れる。わかることはなにもないが、ただひとつ明らかかなことは、これはなんだろう、という疑問形があることである。そしてその問いによって、あらゆるものに近づくことができる。問いは、もつとも遠くへ届く光である。松ぼっくりや馬の歯といったものから、文字のない詩を読む人もいるのである。

#### 【明治書院解答】

【問一】 初対面の人との話は、▲「ずぶりと差し込まれる」のただならぬ意味合いは問4と同時にちゃんと伏線回収するべき思いもよらない話を聞くことができ、既知の世界が広がるような衝撃的な出来事があるということ。

【問二】 変わらぬ日常の中でいつもとは違った出来事があると、見たことのない世界が目の前に現れて、新たな発見を生じることがあるということ。

【問三】 日常の中の疑問はいくつも生まれ、ほとんどは答えが見つからず忘れ去られるが、問い続けることで▲「光を追いかける」の比喩の内容説明をサボってはいけない答えに近づくことができるという意味があるということ。

【問四】 誰もが注目するようなものではないことに意識を向け、疑問を抱き想像を巡らすことで、ありふれた日常とは違う世界を感じることに詩の意義があるということ。×意味段落区切りによる致命的な誤読